令和５(2023)年「正覚寺報」1月号

◆お 知 ら せ

令和４年年末と令和５年新年のご案内を纏めてすることをお許し下さい。　記

1.　令和４年年末のご案内

①　除夜会　12月31日(土)22時半～

②　除夜の鐘　12月31日(土)23時～

2.　令和５年新年のご案内

①修正会　元旦(日)零時～

②佛教婦人会新年会1月16日(月)13時～

③初講　1月29日(日)午前10時～

◆年賀状から

今年は、構成を二段にし、まず世界の日本の皆様との共通の話題から入りました。

初段は、ワールドカップはクロアチアとのＰＫ戦の話題によりました。試合は終っても森保監督の優しい評判が高まったのです。

「最初に蹴ってくれてありがとう。」
森保監督の言葉に随念して
「最初に称えてくれて有難う」を御法座毎のお礼の言葉にしたいと存じます。

如来様から賜った**「如来、すでに発願して衆生の行を回施したまふの心(慈悲心)なり(さあ、称えてご覧)**との仰せに勇気づけられて御法座毎に最初にお念仏をお称え下さったお同行をたたえるためであります。称えれば直ちに聞こえて下さるものこそは、本願のお心から喚び続けて居て下さる如来様そのお方のお喚び声だったからです。

二段目は、長い間のお育ての話題です。

―旧年中はお世話になりました。―

「聞で顕(あらわ)した信とはどのような物柄(ものがら)か」、忘れ得ない殿試(でんし)の口頭試問の一節です。
聞と捉えれば聞こえて下さるお名号の働きに遇わせて戴く本質で捉えたことになりますが、これには如来に喚び覚まされる「聞即信(もんそくしん)の即のとき」までの三昧(ざんまい)の広がりがあります。

今年もお同行と共に同じ道行きを辿らせて戴こうと存じます。

なぜ忘れ得ないか、問には、課題と解決策とが揃っていたからです。和上は既にお浄土にお還りになっており、今生の私は、和上の還相回向の働きによりそのお心を深く味わうことができるからです。

観経第十六巻の「極悪人」は、死の床にあって「衆生を往生させたい」との「如来様の優しいお心を繰り返し味わいなさい」との全知識のお勧めに対して死の苦しみの真っ最中にある私にはとても如来様のお心を味わう等と云うことはできません」と応えしたのに対して、「それならただ口に十篇お念仏を称えなさい」とお勧め戴き、お勧めに対して十声のお念仏を称えるというと、死と共に直ちにお浄土へ生まれることができたというのです。お念仏には、如来様の「衆生を一人残らず生まれさせよう」とのご本願と、本願成就したお念仏の行が揃っていた(願行具足)からです。合掌。